

保育士養成課程における母子生活支援施設に関する事例検討

Case Study Shelter for single mothers and their Children with students Nursery Education

足立法子* 近藤莉菜**
(令和5年12月8日受理)

要約

本稿は、保育士養成課程科目「教育相談」において実施した事例検討について、実施方法をふりかえり、受講生の感想から学びの状況把握を試みるものである。本科目では、母子生活支援施設において実際に対応された事例の提供をうけた。受講生には、対象となった母親と子どもそれぞれの心情を考え、現状を解消するための支援としてできることを考えてもらった。終了後の感想から、解決するには難しすぎる事例と感じ、また現実に生じている辛さをつぶさを感じ取っていた。さらに、施設の役割を考えることができたこと、支援者として身につけてほしい事項である「寄り添うこと」や「対象者の立場にたって検討すること」について、視点が向けられていることが見受けられた。

キーワード：事例検討、保育士養成課程、母子生活支援施設

Keywords：Case Study, Course in Nursery teachers, shelter for single mothers and their children

I. はじめに

1. 問題と目的

(1) 教育相談における事例検討

保育者養成課程科目の教育相談において、事例検討を行うことが授業の目的として挙げられている。保育者として対応する対象者となるのは、基本的に乳幼児期の子どものとその保護者である。子どもの発育や発達にかかわる支援や対応、児童福祉施設等において職務にあたる場合もあり、保育者の活躍の場は多岐にわたる。また、子どもだけでなく保護者への支援や配慮についても保育者の職務となる。このたび「教育相談」の授業において事例検討を実施するにあたり、親子関係に関する事例を提示し、支援対象者の心情と対応方法について考える機会を設けた。母子生活支援施設の支援員として実際に対応したケースを用いて、子どもの気持ちや保護者の気持ち、支援指針や支援方法を事例検討を行い、受講生の理解の把握を試みるものである。

本研究では母子生活支援施設において実際に対

応したケースのなかから、保護者および子どもの立場を同時に考えられる事例を用いて検討を試みることにした。施設職員から支援の実際の様子を伝えることによって、学生にとっては状況が想像しやすくなり、また対応方法を検討しやすいのではないだろうかと考えたものである。実際には保育者として対応する際、保育者の年齢に近い保護者への対応をすることも十分に考えられる。また、その保護者が若年者であることも容易に想定が可能である。受講生が親の立場を理解しようとする際、とりあげる事例として、保護者や子どもの心情を言語化しやすいよう、子どもの年齢が受講生の年齢に近いケースから選定した。親子のぶつかり合う心情を受講生がいかに捉え、事例検討を行うのかを探りたいと考えたからである。

事例検討においては、親子それぞれの課題を伝え、どのように支援をするとよいか支援計画を発表した。学生の発表をうけ、施設職員からコメントし、施設や支援員の捉え方や考え方への講評もすぐに行った。受講生の事例検討がどのような対

(*あだちのりこ 保育科准教授 発達心理学)

(**こんどうまりな 社会福祉法人大慈厚生事業会 母子生活支援施設ハーバー大慈)

応にあたるのか、実際の対応と比較を交えて支援者から説明を受けた。さらに、実際にはその親子がどのような状況にあったか、施設においてどのような対応を行ったか説明を受けた。支援者の悩みや実感も含めて講評を受け、事例検討ではあるが、実際の支援者の思いに触れる機会となった。

(2) 施設および支援員としての目的

①専門性の向上

今後、社会に出て行く学生に母子生活支援施設を知ってもらうことで、虐待防止や育児不安の母親を救うことができると考えた。昨今、増加する虐待に対し、保育園や幼稚園などの機関においても、様々な形でかかわる機会が増えている現状にある。受講生に母子生活支援施設の理解をしてもらえることで、彼らが将来において支援にあたる際などに、当該施設を社会資源の一つとしてとらえ、必要に応じた対応を検討できる一助になると考えた。

②受講生自身の身を守る情報の提供

実習に来ていた学生の話から、恋人や友人などプライベートの話をしてもらうことが多かった。中にはデートDVや友人が望まぬ妊娠をして苦労しているなどの悲痛な内容を聞くこともあった。今後、受講生自身がDVや望まぬ妊娠から身を守るができるためには、施設を通して実際に対応した事例をもとに、現実には起きていることであり、受講生自身や彼らの身近な人がそのような状況に陥る可能性があると考えてもらう一つのきっかけとして活用してもらいたいと考えた。これらの経緯から実習のみならず、講義の事例検討をとおした学習機会を提供する意義があるのではないかと考えた。

II. 事例検討による理解内容の把握

1. 方法

1) 事例検討

事例親子のプライバシー保護と安全確保の都合上、事例内容の詳細については本稿へ記載することができないが、受講生にとっては、現実には生じたことを実際に対応した支援者から聞くこと、さらにその親子の状況について支援者として心情を

考え、対応策を考えることを求められた。

母子生活支援施設において親子関係の調整や親と子どもそれぞれに課題があると見受けられる実際の事例について、概要を記載した資料を授業終了後に回収することを伝え、うえて配布し、親子が入所に至った理由や現在の様子について説明した。次に、個人検討シート(図1)を用いて、受講生が個々に母親の想いや子どもの想い、支援者へ望むこと、施設職員としてどのようなことができるか、説明を受けた印象から考えたことを記述するよう求めた。その後、5人程度のグループにおいて、解決すべき問題を支援目標として設定し、どのような支援ができるか検討した。親子関係の課題、母と子のそれぞれの課題と解決方法について話し合い、グループごとに1枚の支援計画表(図2)へ検討内容の記入を求めた。検討しながら不明な点がある場合には質問を受け付け、その都度親子の様子についての情報提供を行った。

話し合ったことを全体へ共有するため、作成した支援計画表にもとづき、目標、課題、支援方法の順にグループの代表者から発表を受けた。受講生が考えた支援方法に対して、実際の対応がどのようなものであったかを説明し、施設職員としての感想を伝え、講評とした。

2) 事例検討での学びの把握

本研究は2022年I期および2023年I期において実施した事例検討を調査対象とした。事例検討終了後すぐに、受講生に事例検討を行って感じたことについて記述を求めた。母親の心情、子どもの心情、さらに施設の役割について理解したことの記述を求めた。

受講生の親子への視点や施設に対する理解の記述から、彼らの学びの内容をまとめ、分類し、その傾向を検討するものである。彼らがどのように親子の心情を捉えたか、どのような学びをし、なにを感じ取ったか、授業後の感想を用いて把握し、検討を試みるものである。

2. 結果と考察

事例検討での記述内容や感想を大学が運用している「クラウド型教育支援サービス・manaba」の

表1 保育士養成課程卒業年次における事例検討；母子生活支援施設利用者「母親の心情」の検討（抜粋）

現在の状況への 思い・願い	夫にDVされた時から人間不信 になっている。	今まで母親も愛情を受けていな い。	毎日家事をするのが疲れた。
	自分に素直になりたいけどなれ ない。	誰かに相談したいけど相手がい ない…	_____
	父親が居ないことや収入面で子 どもに辛い思いをさせるくらい なら、自分が我慢をしようと 思った。	自分自身に余裕がなく、子ども も思うようにいかないことが全 て重なってきている。	自分が悪い、自分が我慢すれば いいという気持ちがなかなか消 えなかったのではないかと。
	（DVにより精神的な影響を受 け）自分の気持ちを相手に伝え る事が出来なかったり、全部自 分が間違えているという考えに なってしまう	子どもを大切に思う気持ちがと ても強い。守りたいという思い も強く、子どものことで責めら れると自分が悪いと思ひ込んで しまう。	自分自身に余裕がなく、子ども も思うようにいかないことが全 て重なってきている。 子ども一緒に落ち着いて幸せな 生活がしたいと願っている。
母親自身として の思い・願い	夫から離れたい。	少しの間、1人になりたい。	気持ちを受け止めて欲しい。
	助けてほしい。	環境を変えたい。	周りからの信頼や愛情が欲しい。
	自分を気にかけてくれる存在が 欲しい。	少しは手伝いをしてほしい。	自分自身も今の現状から幸せに なりたい。
	子育てで大変なことをためてス トレスにつながらないように 日々話を聞いてほしい。	子どもに暴言や手を上げてしま う自分を、誰かに止めて欲しい。	安心できる場所や、自分の素を 出せる場所がほしい。
子どもに関する 思い・願い	自分はいいから子どもを守りたい というのが母親の根底にある。	子どもに自分のような境遇にな ってほしくない。自分ができ なかったことをしてほしい。	子ども一緒に落ち着いて幸せな 生活がしたいと願っている。
	子どもには幸せになってほしい。	子どもが喜べる環境にしたい。	子どもには安全な場所で暮らして 欲しい。
	子どもと顔を伺うことなく楽し く過ごしたい。	娘とわかり合いたい。普通に話 がしたい。	子どもを人と比べたくない。

アンケート機能を用いて提出を求めた。受講生は2022年度Ⅰ期および2023年度Ⅰ期において、計142名であった。事例検討当日に参加しており、なおかつ感想を提出した者が123名であった。123名の記述内容をもとに、母親の心情、子どもの心情、施設の役割への理解について、受講生それぞれの記述内容を分類した。

母親の心情および子どもの心情については、受講生間において類似した記述が多く見受けられたため、親子の状況をどのように受け取っていたかを知る手掛かりとして利用することとした。一方で、施設の役割への理解については、記述内容が多岐にわたっていた。そのため、個々の受講生の記述を内容ごとにカテゴリーを設け、1人の受講生の記述を複数のカテゴリーへと分類することとなり、 $n = 217$ の記述数となった。さらに設けたカテゴリーのうち、類似しているものをまとめて

分類項目を設け、その項目に名称をつけた。

(1) 母親の心情

利用者の心情を検討し、その記載を求めた。学生の記述を概観したところ、類似している内容が多く、彼らが捉えている対象者の心情の傾向を把握するため、記述した内容ごとに分類を試みた。大きく3つの項目に分類ができ、その記述内容を表1に示した。設けた分類項目は「現在の状況への思い・願い」、「母親自身としての思い・願い」、「子どもに関する思い・願い」である。「現在の状況への思い・願い」へは、人間不信になっている可能性が検討され、「今まで母親も愛情を受けていない。」「毎日家事をするのが疲れた。」など母親自身の状況や疲れている気持ちへの視点が見受けられた。また、「自分自身に余裕がなく、子どもも思うようにいかないことが全て重なってきてい

表2 保育士養成課程卒業年次における事例検討；母子生活支援施設利用者「子どもの心情」の検討（抜粋）

母親への 思い・願い	もっと母親に可愛がってほしい。	母親を頼りたい。
	親に対してどう接すれば良いのかわからない。	母親と幸せな家庭を築きたい。
	母に対する甘え方があまりわかっていない。	自分の気持ちを伝えられるようになりたい
	母親を助けてたい。	お母さんに愛して欲しい。
	2人であるときも仲良くしたい、優しくして欲しい。	しっかりと頼れる人が欲しいし、お母さんにそういう人になってほしい。
	楽しかったことや嫌なことなど今日あったたわいのない出来事などを何気なく言ったり、時にはけんかもするようなごく普通の関係でありたい。	お母さんとちゃんと向き合いたい。気を遣いたくないし、我慢もしたくないし、寂しい思いや嫌な思いもしたくない。
子ども自身 としての思 い・願い	自分の思いをきいてほしい。	自分自身の存在を否定しないでほしい。人は人、自分は自分と知ってほしい。
	ネガティブな気持ちになってしまい、愛されていないと強く思ってしまい、周りが見えなくなってしまっている。	思ってもいない言葉が出ることもあるかもしれない。子ども本人も「そんな言葉言いたくないのに」と自分自身が嫌になっていることもある気がする。
	人と関わることは苦手ではないけれど、良好な関係をつくることに難しさを感じている。	家の中で怯えて生きてきてるから、人と接することが苦手だと思う。友達や自分のことを話せる人が欲しいと思う。
	自分は望まれて生まれてきていないと思ってしまい、ネガティブになってしまっている。	母のもとにいたくない。自分は悪い子だ。もういやだ。私ばかり。
両親への 思い・願い	慣れない場所に連れて行かれてとても不安な気持ちがあり、親子3人で暮らしたい。	お母さんとお父さんみんなで仲良く暮らしたい。でも2人ともに笑っていてほしい。
	両親仲良くして欲しい。DVされている母を見るのが辛い。母親を助けてたい。父に伝えたいけど何されるか分からないから怖い。言えない。	両親と暮らしたい。でも、母親の辛そうなところも見てるので、笑顔で楽しそうにしている姿を見たい。

る。」「自分が悪い、自分が我慢すればいいという気持ちがなかなか消えなかったのではないか。」などと、余裕のない状況にあり、さらに自分を責める気持ちも生じていることについて言及があった。

「母親自身としての思い・願い」に分類した記述について、「夫から離れたたい。」「少しの間、1人になりたい。」「助けてほしい。」「自分を気にかけてくれる存在が欲しい。」などと、母親の立場にたった思いが検討されており、母親自身の言葉かのように受け取ることができる記述が多く見受けられた。また、「子どもに関する思い・願い」の項目へ分類した記述においては、「自分はいいから子どもを守りたいというのが母親の根底にある。」「子どもには幸せになってほしい。」など、子どものことを大切に思い、彼らの成長を願う母親の心情が見受けられた。

(2) 子どもの心情

子どもの心情についても、学生の記述内容を3つの項目に分類することができた。その記述内容を表2へ示した。

子ども自身の心情として、「自分の思いをきいてほしい。」「ネガティブな気持ちになってしまい、愛されていないと強く思ってしまい、周りが見えなくなってしまっている。」「人と関わることは苦手ではないけれど、良好な関係をつくることに難しさを感じている。」などと、困難が生じている現状への心情が検討されていた。

また、母親への思いや願いについては、「もっと母親に可愛がってほしい。」「親に対してどう接すれば良いのかわからない。」「母に対する甘え方があまりわかっていない。」「母親を助けてたい。」など、親に求める母親としての態度とともに、子ども自身が母親を助けてたいと思っていることについても言及されていた。さらに、両親との生活を

表3 事例検討参加後の施設役割への理解（記述数：n=217）

分類項目	記述数	分類した記述内容（抜粋）
自立へのサポート	59	<ul style="list-style-type: none"> ・親子が幸せに生きていけるようにする施設 ・配偶者などのDVからのがれて母娘で暮らしていくための基盤を作っていく施設 ・日常的に積極性を持って母子と関わり安心となるよう自立していけるよう支援する。 ・人間関係を築いたり、自立した生活が送れるように支援する施設 ・精神面や収入など、生活する上で不安定な要素のある母子を様々な面で支援する施設 支援には、安定を図り、その後どのような生活をしていくのかを具体的に提案することも含まれ、入所している時だけでなくその後の支えにもなるものだと思う。 ・保護するだけではなく、親子で暮らすため、施設から出て自立するための支援も行っていく役割がある。 ・子どもと親が自立できるようにする。
親子のための施設	41	<ul style="list-style-type: none"> ・子ども達が幸せに暮らせてお母さんも落ち着いて生活が出来て子どもと関われる。 ・困っている親子を支援する。 ・お母さんと子どものより良い関係を築く支援ができる場所 ・子どもにも母親にもしっかり寄り添う役割がある。 ・子どもだけでなく母子共に支援する保育園とはまた違った支援の形である。 ・子どもだけを支援するのではなく、親子で自立し、幸せに暮らしていくために、安心感を得ることができる場であらなければならない役割がある。
母子の保護	30	<ul style="list-style-type: none"> ・とにかくお母さんとその子どもが安心して暮せる、お母さんたちの安全基地という機能、役割がある。 ・施設に入所することで、親子を虐待などから守る役割がある。 ・虐待を受けている子どもやDVを受けている親が心を落ち着かせられるような施設 ・心の支えとなる施設・入所理由は身体的・精神的な暴力や離婚、経済的な問題などの事情で生活が困難になった母子を保護する役割を担っている。
生活のサポート	24	<ul style="list-style-type: none"> ・母子ともに生活しやすい環境を整える。 ・母親と子どもの生活を支える施設 ・母子生活支援施設では、母と子が穏やかに生活できるように手を尽くしている。 ・DVや虐待などの色々な理由があって、家にいることができない、難しい親子の生活を支援するところ。 ・それぞれの立場になって物事を考え、第三者しかできない冷静な判断をし、親子をサポートする
親子をつなぐ役割	19	<ul style="list-style-type: none"> ・母親と子どもの向き合う場、新たな家族の形見つけていける安全が確保された施設。 ・離れている親子の気持ちを繋ぎとめる。 ・親子との関わりを大切にしていく。 ・母子の心のサポートや親子関係の修復の手伝い、相談などを聞く役割がある。 ・子どもに対して、親に対して1人ずつの支援だけでなく親子関係の支援もしている。
尊厳を守る	17	<ul style="list-style-type: none"> ・家庭内でさまざまな事情を抱える方や子どもを支え、支援していく施設だと思った。 ・母と子を一人ひとりの人として支援してくれる。 ・自分の気持ちを言えない環境にある人たちを支援し、手を差し伸べることができる施設 ・母親と子どもの関係性の（良好でおだやかな関係でいられるように）中立を持つ。また、各家庭の状況や親子関係をしっかり理解した上の支援を行う。 ・お互いの気持ちに寄り添った支援→お互いの気持ちを伝えるなど
気持ちのサポート	15	<ul style="list-style-type: none"> ・自己犠牲を持っている方が多いので否定はせずに、そういう考え方があるのねと受け入れること ・心を落ち着かせられるような、心の支えとなる施設 ・母親の不安を取り除き子どもと2人で生活できるように支援をする施設 ・親子の今だけでなく今後を支えていく。気持ちや状況を理解し、解決していく役割がある。
安心・よりどころ	12	<ul style="list-style-type: none"> ・利用者の心と体の拠り所 ・子どもだけではなく大人も気軽に相談したり安心できる場所 ・母子ともに安全に過ごせる場所になる施設

求めることも子どもの願いのなかに存在するだろうことが視野に入れられており、子ども自身がさまざまな思いをもって生活していることの可能性を学生が捉えていることが見受けられた。

(3) 母子生活支援施設の役割への理解

母子生活支援施設についての理解がどのようになされているかについて記述を求め、先の方法によって記述内容を分類した。分類して設けた項目とともに、記述内容を代表する記述を抜粋し表3にまとめた。

次の7つの項目によって施設の役割が理解されていることが検討でき、表3. 事例検討参加後の施設役割への理解へ示した。学生の記述内容ごとに項目を立てたところ、 $n = 217$ の記述があり、それぞれに設けた項目をさらに分類し、「自立へのサポート」「親子のための施設」「母子の保護」「生活のサポート」「親子をつなぐ役割」「尊厳を守る」「気持ちのサポート」「安心・よりどころ」の機能があると把握していることが分かった。それぞれの内容から、母子生活支援施設についてどのような役割や機能があると理解しているのか、学生の記述を概観したところ、「自立へのサポート」として、「親子で暮らすために、施設から出て自立するための支援も行っていく役割があること」、「親子のための施設」であり、まずは「生活をサポート」してそれを営むための支援を行い、制度などの情報を提供しており、冷静な判断を母親とともに実施することなどが記述されていた。さらに、「母子を保護」するだけでなく、「親子をつなぐ役割」をもち関係修復をサポートする役割を担っていること、さらに「尊厳を守る」とした分類の記述では、お互いの気持ちに寄り添った支援をしつつも中立を保ち、親子が意見を言いあえる関係性になるよう配慮していることへの視点があることも見受けられた。また、DV被害や経済的な困窮、うまくいかない現状と立ち向かう対象を支援するために「気持ちのサポート」を行い、かれらの「安心・よりどころ」となるよう心掛けているであろうことも言及されていた。

Ⅲ. まとめ

1. 事例検討の実施方法

実際に対応している施設職員の方とともに、実際の事例について検討することは、学生にとって貴重な体験となったのではないかと考える。支援者の立場から、どのような願いを保護者や子どもたちにもち、さらに現状を把握しながら、実施可能なことを検討し、それを互いに意見を出し合うことは、相当に知識と経験を求められることにも見受けられる。実際に対応をしようとするると困難に思うことであっても、施設職員の方の経験と知識を借りながら検討する姿もあり、難しい事例ではあるが、なんとか向き合うことができたようにも見受けられた。

調査対象となった受講生の記述のなかにも見受けられるように、他者の気持ちになってものごとを考えることに対して、難しさを感じすぎずに捉えることができる学生が多いようにも見受けられる。それぞれの立場にたって心情を考え、さらに学生同士で意見を交換しあうことにより、利用者の立場から支援を考える情報として用いることができたのではないだろうか。事例検討の実施方法として、支援対象者の心情を考えたいうえで支援計画を検討することは意義深いように見受けられた。

2. 学生の理解内容の把握

児童福祉施設のひとつである母子生活支援施設の事例をもとに学生には支援者の役割の視点を検討してもらうこととなった。表3. 事例検討参加後の施設役割への理解から、学生たちが施設の機能であるシェルターとして保護すること、施設からの退所を目指す自立へのサポートだけでなく、心身ともに疲れ傷ついているであろう保護者や子どもたちに対して、支援者が寄り添い、かかわっていることについても言及しており、支援者がソフト面において支援することへも理解していることがわかった。このことから、1回の事例検討における学びだけでなく、これまでの保育者養成課程において学んできたことや体験したことが蓄積された視点が活用されているようにも考えられる。具体的な制度の理解は本研究の調査対象とし

ていないが、幼稚園や保育所をはじめとする支援施設ごとに役割は異なるものの、学生が支援者としての視点を持ち、その力が養われ事例検討において発揮されたように見受けられた。

3. 今後の展望

心情として検討がしやすいと考え、学生の年代に近い子どもが利用者である事例を選択した。今後は幼児などの子どもとその保護者の事例についても事例検討の実施が可能か、検討をしてみたい。さらに、保育者としてさまざまな役割を担うこととなる学生にとって、事例検討を体験することによって、他者とともに検討し、協力をして支援を実施することについて、事例検討をとおして学ぶ機会となったのではないだろうか。支援活動において、対象者を捉え対応を検討する際に、ともすれば視点が固定されてしまうこともある。事例検討を行うことによって、その視点を柔軟に持つことができるよう、他者の意見を聞きそれを共有することの意義を感じた。また、検討したことが実際にどのような支援につながったのか、現場でのその後の様子や実際の対応など、検討したことについて示唆をうけることも有益な学習になるように見受けられた。

受講生の感想から、より母子生活支援施設を深く知ることができたという声があった。また、実際に事例検討を行いながら施設の役割や職員の支援方法、ドラマでしか見たことのないような家庭環境が実際にあることを実感しているように見受けられる場面があった。さらに、「寄り添う姿勢とはどういったものなのか」、「福祉とは？」といったように、学生自身が支援対象者について悩み、考えることで、より深く知りたいと思うきっかけになったのではないだろうか。

事例検討を実施してみると、想像した以上に受講生自身の考える力やその人の立場に立って寄り添おうとする姿勢がみられ、彼らがつ可能性や他者に寄り添う力があることに気づかされた。母子生活支援施設の周知や後進育成のつもりで事例検討を実施しようと試みたが、施設職員の側が受講生から新たな視点を得る機会ともなった。今後とも共に学ぶ機会となる捉え、受講生がなにを知り

たいと考えているのか、どのような情報があれば学びが深まるかを検討し、講義内容を検討していきたい。

【参考文献】

佐藤郁哉, 2008, 「質的データ分析法」, 新曜社

保育士養成課程における母子生活支援施設に関する事例検討

*母と子、それぞれの課題
【母】

【子】

*それぞれの立場に自分になったとしたら、どんな気持ちになるか？
又、第三者(職員)に何を求めるか？
【母】

【子】

*それぞれの求める事、課題に対して職員の立場として、何をする？何が必要か？
【母】

【子】

*親子に対し、担当職員が協力してどんな支援が出来る？

図1：個人検討シート

支援計画表		
目 標		
	気になる様子・課題	左に記入した課題等に対する、支援の具体的方法

【グループ名： 】 みなさんの氏名を記入してください

図2：支援計画検討シート